

一喜一憂

「一喜一憂」

状況の変化に喜んだり、心配したりすること

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

No.19

金継ぎの魅力

ガラクタとしか思えず、割れてしまったパレスチナの伝統工芸ヘブロングラスのポウルを、日本もそのついで。旅行したと写真付きで連絡してきた。

ヘブロングラスは、パレスチナを代表する伝統工芸である。パレスチナは、約8千年前に設立された世界で最も古い都市のひとつ。2017年に「ヘブロン/アル・ハリル旧市街地」は、パ



ターコイズ色(左)と紺色(右)のガラスコップ

色、明るく緑がかった青色)で有名で、溶けたガラスにコバルトを加えて紺色にし、銅を加えてターコイズブルーにしている。カラーでない伝わりにくいのだが、モノクロ写真でもこれだけの違いがある。



金継ぎしたヘブロングラスのサラダボウル

レズチナの世界文化遺産として登録されている。ヘブロン産のガラス産業は、ローマ時代の紀元1世紀頃にさかのぼると言われている。当時の遺跡からガラスが発見されている。ヘブロンでは、700年にわたって吹きガラスの伝統工芸の技術を守っている家族もある。ヘブロンガラスは、紺色とターコイズブルー(トルコ石の青色)で有名で、溶けたガラスにコバルトを加えて紺色にし、銅を加えてターコイズブルーにしている。カラーでない伝わりにくいのだが、モノクロ写真でもこれだけの違いがある。



割れる前のヘブロングラスのサラダボウル

でも1週間、数ヶ月かかることもあるという。金継ぎしたターコイズブルーの直径22センチのボウル。2000年頃に買い求めて、パレスチナでも日本でもサラダボウルとして重宝していたが、水道の蛇口にぶつけて割れてしまった。捨てるに捨てられず、ガラスも金継ぎできるというので修理に出したという。

ヘブロングラスでは大きめのサイズの食器はあまりなく、ターコイズブルーのポウルに目ぼれして購入したという。元々、同じものは作れないと言われる吹きガラスの作品、それが日本の伝統技術によって、唯一無二のモノに生まれ変わったと、大満足そう